The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	17 世紀の医学自然学雑誌に収録された母親の想像（力）が与える作用の稀な例
Author(s)	安西, なつめ
Citation	メタフュシカ. 2022, 53, p. 37-44
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/90208
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《研究ノート》

17 世紀の医学自然学雑誌に収録された母親の想像（力）が与える作用の稀な例

安西なつめ

はじめに

初期近代には妊娠中の女性の想像（力）（imaginatio）が胎児に影響を与え、胎児の外形を変化させると考えられていた。女性が妊娠時、特に妊娠初期に想像（力）に働きかける何らかの外的対象を目撃し、時に繰り返し見ることで、母体の精気や血液に変化が生じ、形成途中の胎児の外形が変化すると考えられたのである[1]。出産された異常のある子どもはしばしば怪物／奇形（monstrum）と表された[2]。本稿では 17 世紀に創刊された初期の医学自然学分野の学術雑誌を資料として、母親の想像（力）の作用によると報告されたものの中から腹部の異常例 2 例を取り上げ、想像（力）に働きかけたとされる対象の特定方法を考察する。

1．資料と方法

資料として西洋における医学自然学分野の先駆的雑誌である Miscellanea curiosa, sive ephemiridum medicophysicarum Germanicarum academiae naturae curiosorum（以下、『医学自然学報』）（1670-）を用いた。同雑誌は神聖ローマ帝国のシュヴァインフルトに設立されたアカデミーである Academia Naturae Curiosorum から刊行され、国内のみならずウィーン、ローマなどの諸都市の医師から医術に役立つ鉱物、植物、動物に関する研究が広く収録された。創刊号の各論考に付された主題によると、収録論考は病理学、自然学、解剖学、治療学、植物学、外科学、化学、数学の

---

1 想像（力）がどのようにして物体である身体に作用するかを医学的に論じた著作に Feyens T（1608）や Licetus F（1616）などがある。imaginatio の語の理解と使用は時代、分野、個々の著作において異なる。本稿では 17 世紀においてこの主題に影響を与えた上記の著作の理解に沿い、外的対象によって精気や血液の運動などを変化させるもの、あるいは間接的にその指揮に携わるものを imaginatio（想像（力））とした。上記 2 作は本稿の対象資料である『医学自然学報』、および同時期に創刊された『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』の想像（力）に関する論考内でも引用が見られた。

2 同時期における怪物／奇形あるいは怪物的なものが表す範囲は広く、現在におけるいわゆる奇形に加え、正常を逸脱した大きさの部分をもつもの、珍奇な動植物なども含まれた。

8 分野に分類され、創刊号では病理学に分類される報告が多かった[3]。本稿ではこの『医学自然学報』1–10 巻（1670-1680）に見出された妊娠中の女性の想像（力）が原因とされる怪物／奇形の報告を検討した[4]。

『医学自然学報』の 1–10 巻には 1519 題の観察・症例（observatio）に加え、各巻末等に加えられた個別の論考（tractatus）、書簡（epistola）および付記（appendix）などが含まれる。これらのうち、妊娠中の女性の想像（力）が胎児に作用した例としては、imaginatio の語が用いられ、かつ原因としての想像（力）に対する言及が明確なものに限っても 18 題見られた。本稿ではこれらの報告の中から、これまで想像（力）の作用に関する文脈において取り上げられる機会の少なかった腹部の異常を示す 2 例を対象とした。

２．母親の想像（力）が原因と考えられた特異な例

母親の想像（力）を原因として生じるとされた代表的なものに、母斑、両親とは異なる皮膚あるいは毛髪の色、多毛などがある[5]。母斑とは妊婦が妊娠中に強く欲したものや恐れたものなどの形が胎児の皮膚に像として刻印されるというものである。母斑については 17 世紀にジュリオ＝チェーザレ・ヴァニーニ（Giulio Cesare Vanini, 1585-1619）などが論じて広く知られた[6]。また想像（力）が皮膚あるいは毛髪の色、毛髪の量（多毛）に影響をもたらしたとされる例は古くから知られてきた。この点についてはアンブロワーズ・パレ（Ambroise Paré, 1510-1590）の『怪物と驚異 Des monstres et prodiges』（1573）の中でも図版とともに紹介され、こうした例が古代から知られてきたことが言及されている[7]。また同様の例は 17 世紀においても『医学自然学報』と同時期にコペンハーゲンの解剖学者トマス・バルトリン（Thomas Bartholin, 1616-1680）によって創刊された『コペンハーゲンの医学・哲学紀要 Acta medica et philosophica Hafniensia』（1673-1680）でも報告されている[8]。

次いで想像（力）の作用の例としてよく知られたのが四肢欠損や多指などの四肢の異常、また口唇裂や口蓋裂を含む頭部の異常である。これらについても『医学自然学報』および『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』両雑誌で報告されている。

しかしこうしたよく知られてきた想像（力）の作用の例に対し、『医学自然学報』に見られた腹部の異常例は稀である。その理由は外形から確認されるほどの腹部の異常を想像（力）の作用

---

3 安西なつめ（2021）.

4 1670-1687 年の『医学自然学報』における病理学的な報告に注目した研究に Conforti M（2015）がある。この中で Decuria I（1670-1680）, II（1682-1692） では anatomia あるいは monstra に分類される報告が多いのに対し、Decuria III（1694-1706）では monstra の報告がほとんど見られなくなっていくことが指摘されている。

5 ロバート・バートン（Robert Burton, 1577-1640）の『憂鬱の解剖 The Anatomy of Melancholy』（1621）第 1 部第 2 章第 3 節第 2 項「想像力の力」には 17 世紀前半における想像（力）の理解と、当時共有されていた想像（力）とその作用のおおよそのヴァリエーション（母斑、皮膚あるいは毛髪の変化、兎唇のほか、想像（力）による病気、死、回復など）が多数の参照先とともに記されている。Burton R（1628）, I, 2, 3, 2, Of the force of Imagination.

6 Vanini G C (1616).

7 Paré A（1628）, pp. 1020-1022. パレ以前にはピエール・ボエスチュオーの『驚異の物語集』（1560）にも見られ、パレの著作における図版と類似の構造の図版が付されている。Boaistuau P（1567）. V, pp. 14-16.

8 Anzai N (2022).

に結び付けて報告された例自体が少ないこと、加えてこれらの例が医学の観点から観察され、その所見が詳細に記載されたという点にある。

『医学自然学報』の 1–10 巻において、想像（力）を原因とする腹部の異常例を示す報告は 2 題見られた。1 題は 1673 年に刊行された第 3 巻収録の「胎児の皮膚の下で突き出た臓器 Visceribus sub cute prominentibus in foetu」である[9]。この報告は Osterwiek および Hildesheim の医師で Academia Naturae Curiosorum の会員だったフリードリヒ・ラッチムンド（Friedrich Lachmund, 1635-1676）によるもので、1644 年 11 月 28 日に Rheden で生まれたこどもの報告である[10]。報告内では一枚の図版とともに簡潔な所見が記されている（図 1）。図版には肝臓（図中 2）、胃（図中 3）、腸（図中 4, 5, 6）の脱出が描かれている。図版のみでは欠損箇所が判断できないが、所見内に膜に関する記述がなく、臓器がむき出しに描かれて見えることから腹壁破裂と思われる。同様の症例に臍帯ヘルニアがある。腹壁破裂と臍帯ヘルニアはどちらも腹壁の異常によって腹部内臓の体外への脱出が見られるが、腹壁破裂は臓器が腹壁の裂孔から羊膜（ヘルニア嚢）なしに脱出するのに対し、臍帯ヘルニアは臓器が臍帯から比較的大きな欠損孔で羊膜および腹膜に被膜された半球状の袋の状態で脱出する。ただしこの報告例では脱出した臓器として心臓（図中 1）が描かれており、これが出産時あるいは出産後の外的な原因によるものでないとすれば更に稀なケースであっただろう[11]。報告では短い所見の後、この特異な症例の原因が述べられる。報告によればその原因は屠られた子ウシの内臓が取り出される様子を注意深く見ていた妊娠中の女性の想像（力）と考えられ、その想像（力）

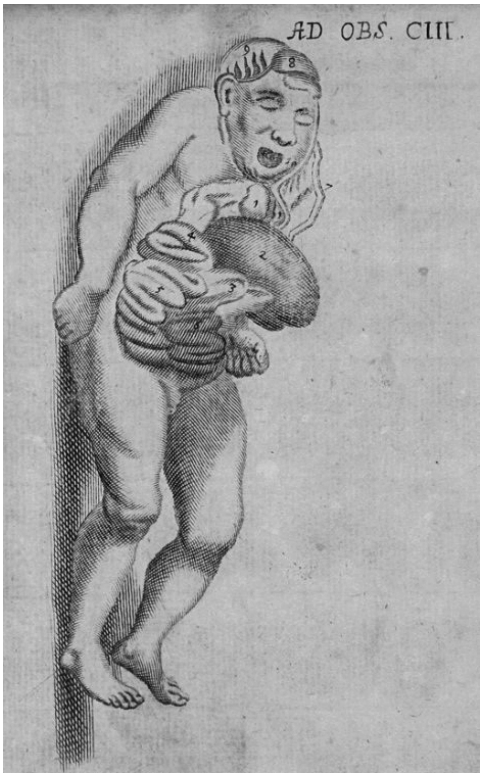

図 1 『医学自然学報』に見られる腹壁異常の例（Miscellanea curiosa, sive ephemiridum medicophysicarum Germanicarum academiae naturae curiosorum, 1673. Obs. CIII） The Royal Danish Library 所蔵

---

9 Lachmund F (1673).

10 Friedrich Lachmund は 1669 年出版の鉱物学の著作『ヒルデスハイムの鉱物学 Oryktographia Hildesheimensis』（1669）で知られる。この著作はライプニッツの『プロトガイア Protogaea』（1749）に影響を与えたとされる。Lefèvre W, Renn J, Schoepflin U.（2003）. p.189.

11 心臓が腹腔内あるいは胸壁外に脱出する Ectopia cordis（心臓脱出）の最初の報告として、しばしばニコラウス・ステノの "Embryo monstro affinis parisiis dissectus" が挙げられる（Steno N. 1673a）。この論考は先天性心疾患であるファロー四徴症の最初の記述として知られ、そのためファロー四徴症は Steno-Fallot tetralogy と表されることがある。Ectopia cordis に関しては 18 世紀に Martínez（1723）によって考察され、19 世紀に Weese C（1819）や Todd R B（1836）によって整理された。Gabriel A, Donnelly J, Kuc A, et al（2014）参照。

の力が屠られた子ウシと似た内臓の配置を刻印し、自然精気の濫用・悪用（abusus）によって胎児の内臓が配置されたのだとしている[12]。

この報告に加えられたキール大学の医学教授ヨハン・ダニエル・メジャー（Johann Daniel Major, 1634-1693）による注記（scholion）の中で、1669 年 8 月 13 日に生まれ、同様に腹部内臓の脱出が見られた少女への言及がある。これが 1676 年刊行の『医学自然学報』第 4 巻 appendix III 内で報告された「ベルリンで生まれた怪物的な少女 Puella monstrosa Berolini nata」である[13]。これはブランデンブルク選帝侯フリードリッヒ・ヴィルヘルム（Friedrich Wilhelm of Brandenburg, 1620-1688）の侍医で植物学者でもあったヨハン・ジギスムント・エルスホルツ（Johann Sigismund Elsholtz, 1623-1688）によって報告された。この報告にも図版が一枚付されているが、腹部の臓器が袋状に包まれて描かれていることから臍帯ヘルニアと思われる。図版には腹部の異常のほかに上肢・下肢の異常、体の複数箇所に見られる動物の尾のようなひも状の伸びだしなどが記録されている。文章による所見は先のフリードリヒ・ラッチムンドの報告よりも詳細である。

先の例と同様、この報告においても異常の原因が母親の想像（力）に帰せられている。この例では女性がブタの屠殺に複数回立ち会ったことが原因とされ、一度でも内臓の処理のために吊るされたブタを見たことがあれば、この怪物的な出産との類似が分かるだろうと述べられている。こうした記述からは、想像（力）に働きかけた外的対象の特定において胎児の外形に見られる特徴との類似が重要であったことが分かる。また興味深いことに、この報告において対象の特定は母親ではなく別の女性によって行われた。報告内では出産した当人には異常の原因となるほどの恐怖（terror）や動揺・不安（perturbatio）の心当たりがなく、そのため母親の自覚のないまま、強い想像（力）の介在によって胎児に影響が及ぼされたと報告された[14]。

腹壁破裂の記録としてはしばしばコンラドゥス・リュコステネス（Conradus Lycosthenes/Wolffhart, 1518-1561）の『驚異と怪異の年代記 Prodigiorum ac ostentorum chronicon』（1557）が言及される[15]。リュコステネスの著作内では 1547 年の例が紹介されており、記述はごく短く図版が一点付されている。同個体には頭部と下肢の変形も見られる[16]。『驚異と怪異の年代記』では人に対する神の怒りを示すものとして多数の驚異および怪異が年代順に記述された。腹壁破裂の例もまた驚異と怪異の膨大な例の一つとして取り上げられている。

また同時期のピエール・ボエスチュオー（Pierre Boaistuau, 1517-1566）による『驚異の物語集 Histoires prodigieuses』（1560）28 章にも腹壁破裂と思われる例が見られる[17]。この著作にも図版が

---

12 ここでは想像（力）の力として imaginativa vis の語が使用されている。またこの報告には怪物（monstrum）あるいは怪物的な（monstrosus）の語は使用されていないが、自然の誤り（Naturae Errores）の語が使用されている。

13 Elsholtz J S (1676).

14 この報告の最終部には以下の著作が列挙されている。同時代において怪物／奇形に関して特に参照すべき資料として挙げられたと考えられる。Schenkius J G (1609), Carranza A (1629), Paré A (1594), lib. XXIV, Weinrichius M (1595), Bauhinus C (1614), Licetus F (1616), Aristotle, De generatione animalum, lib. IV, cap. 3.（アリストテレス，島崎三郎，1969）.

15 Ballantyne, J. W (1904).

16 Lycosthenes/Wolffhart C (1557), p. 596.

17 Boaistuau P (1567). XXVIII, pp. 131-132. 手稿が Wellcome Library の web 上で公開されている（MS.136）。https://iiif.wellcomecollection.org/pdf/b19662506（最終閲覧日 2023 年 1 月 7 日）

一点付されているが、頭部と下肢の変形がなく、リュコステネスのものとは別の例である。図版では胸部に及んで臓器が露出している様子の男児が描かれている。記述では腸などの臓器がむきだしになっていることや、古来こうした例はほとんど見られないことに言及されている。またガレノス（Galenus, 129-216）などを挙げ、古代より人体の構造の理解に対して解剖が果たしてきた役割が述べられているが、この著作の主題はあくまで驚異であるとして医学の成果には触れずに終えている。ボエスチュオーは想像（力）（imagination）や精液の過剰、子宮の狭窄などを怪物の原因としていたがここではいずれにも言及されていない[18]。

腹壁破裂や臍帯ヘルニアの原因は現在でも明確に解明されているわけではない[19]。上記で確認したように、腹壁破裂と思われる例は 16 世紀に驚異あるいは怪物的なものの一つとして記録されていたが、その原因は妊婦の想像（力）とは結び付けられていなかった。

３．聞き取りによる対象の特定

以上のように、雑誌内の 2 例はいずれも母親が動物の屠殺を見たことに起因するとされ、またその特定方法が聞き取りによるものであることも共通している。現在では超音波検査などによって出産前の胎児の状態を知ることができるが、17 世紀には出産してはじめてその異常が判明した。そのため想像（力）を原因とする報告では多くの場合、異常のある出産という結果を確認した後、聞き取りによって母親が過去に目撃したものの中から胎児に影響を与えるに至った対象を特定するという方法がとられている。この方法は妊娠期間中に抱いた強い欲望・欲求や恐れが現れるとされた母斑の例においても同様である。また聞き取りにおける対象の特定に際しては、通常妊娠期間中に妊婦自身によって目撃されたものであること、また目撃したものが生まれた子どもの外形に似通っていることが条件とされた。ただし本稿で取り上げた第 4 巻の少女の例では、聞き取りの対象が出産した女性以外に周囲の人物にも及んでおり、母親自体にはもともとの原因である対象に心当たりがなかったとされている。従来、想像（力）が作用する際には母親の強い衝撃や恐怖、欲求が自覚的に忘れがたく、時に長期間母親に留まっていたためとされることが多い。しかしこの例においては想像（力）の作用の主体である母親自身がその対象となる像や場面に自覚的かどうかという点よりも、出産された子どもの外形に似たものや場面が優先され対象が決定された。この点は想像（力）の作用の機序において、母親の想像（力）がどれほどの力で胎児に働きかけると考えられていたかを考察する際に注意すべき点と言えるだろう。

４．「見る」ことによる作用

怪物／奇形などの通常から逸脱した出産における想像（力）の作用としては、想像の元になるものとして典型とも言える組み合わせが知られてきた。たとえば「四肢の欠損・変形－（戦争等

18　ボエスチュオーはアリストテレス、ヒポクラテス、ガレノスを引きながら、怪物の原因として想像（力）、精液の過剰・欠陥・腐敗や自然の欠陥・欠如としての子宮の狭窄、母体への打撃、受け継がれる病気などを挙げており、これらの多くがパレに引き継がれたとされる。鍛治義弘（2020）。

19　臍帯ヘルニアは 3000 ～ 5000 人に 1 人、腹壁破裂は 5000 ～ 10000 人に 1 人程度の発生と推定されている。臍帯ヘルニアには他の先天奇形や染色体異常が伴う場合があることが知られている。

により四肢を失った）物乞い」、「無脳／小頭など頭部の一部欠損－蛙」、「多毛－毛皮をまとう聖ヨハネ」、「両親とは異なる皮膚の色－該当する皮膚の色をした人物の絵や像」などである。いずれの場合でも想像（力）の作用には想像（力）の保持者が実際に対象を「見る」という行為が必要になる。そのため報告によっては対象を繰り返し見ていたか、注意深く見ていたか、どの程度の期間見ていたかにも言及されることがある。

またこの「見る」という行為が胎児に与える影響への懸念から、妊婦が怪物／奇形あるいは怪物的なものに遭遇すること、見ることは一般に避けられる傾向にあった。この点はパレが結合のある女性について、その姿が妊婦の想像に残される懸念から国外に追放されたと紹介している[20]。また『コペンハーゲンの医学・哲学紀要』に収録されたトマス・バルトリンによる報告においても、同様に妊婦が怪物的なものを見ることは避けるべきとされており、17 世紀後半においても共通の見解であったことが分かる[21]。しかし本稿で取り上げた例で述べられた動物の屠殺、内臓の処理の場面は、それまで避けるべきとされた怪物的なものとの遭遇とはやや性質が異なる。妊婦に影響を与えると考えられた外的対象の範囲は従来知られてきたものよりも広範であり、典型となった対象との組み合わせ以外にも出産の状況に応じて柔軟に判断されていた可能性がある。

おわりに

17 世紀に創刊された医学自然学の雑誌に見られた腹部の異常例から、報告例の少ない稀な症例においても母親の想像（力）が原因として適用されていたことが分かった。これまでの妊娠中の女性の想像（力）に関する先行研究では典型例と言える症例をもとに論じられることが多かった。しかし『医学自然学報』の例からは母親の想像（力）が胎児に影響を及ぼすと考えられていた事例および事例と対象の組み合わせが従来論じられてきたよりも多様であることが確認される。一方ですべての異常な出産、怪物／奇形の原因が想像（力）に帰されていたわけではない。今後は医学自然学雑誌の性質を踏まえ、こうした少数の報告例も含めて想像（力）が作用すると考えられた条件や範囲について検討する必要がある。

加えて本稿では、比較的稀な例においてもその他の例と同様、対象が出産後に確認された子どもの外形にもとづいて選ばれていたこと、加えてその特定が当事者あるいは関係者による聞き取りによって行われていたことが確認された。これは一方で、異常の原因が解剖などによる医学的な方法によって特定されたわけではなかったことを示している。当時においても怪物／奇形とされた別の報告では外表の報告のみならず解剖の所見が報告されている。しかしそれらは内部構造の異常を記録するにとどまっており、原因に関しては記述されていないものが多い。雑誌内における怪物／奇形の記録は病理学的な観点から意義があるものの、当時の解剖による所見は怪物／奇形と表される異常について原因の解明をもたらすには至っていなかったか、あるいは原因の解

---

20 Paré A (1628), p. 647.

21 Bartholin T (1675).

明自体を目的として行われたのではなかったと考えられる[22]。

母親の想像（力）と怪物／奇形の出産に関する議論は、人文学、博物学、政治、宗教の観点から高まっていた怪物／奇形への関心と、想像（力）が物体である身体にどのような原理で作用するかを説明する医学的な取り組みとの交点にあって 17 世紀に最盛となる。記録媒体としての雑誌の創刊は以前よりも正確に怪物／奇形あるいは怪物的なものの共有を進めた。そのうちには母親の想像（力）を原因とすると考えられた多様な例が含まれる。17 世紀において想像（力）が作用すると考えられた範囲やその機序、また怪物／奇形と想像（力）が結び付けられた背景については、驚異や怪異を網羅的に記した人文学的著作との差異を踏まえ、今後更なる検討を要する。

科学研究費補助金「17 世紀における医学自然学雑誌の創刊に関する比較研究」（課題番号：20K12908、研究代表者：安西なつめ）による成果の一部です。また内容の一部を大阪大学「世界哲学の日」講演「切り開いて見えるもの、見えないもの―初期近代の医学と「想像の力」―」（2022 年 11 月 26 日、オンライン）で発表しました。

（あんざいなつめ　哲学哲学史・助教）

参考文献

Anzai N. The effect of imaginatio on the body as discussed in Northern Europe's first scientific journal.『待兼山論叢』第 56 号哲学篇. 2022. pp.1-14. 掲載予定

Ballantyne J W. Manual of antenatal pathology and hygiene. Green & Sons; 1904.

Bartholin T. "Gravidarum Imaginatio". In: Bartholin T. Acta medica et philosophica Hafniensia. Vol. 2. Ann. 1671-73: Haubold; 1675. pp. 1-3, No. I.

Bauhinus C. De hermaphroditorum monstrosorumque partuum natura. typis Hieronymi Galleri; 1614.

Boaistuau P. Histoires prodigieuses. Jaques Mace; 1567.

Burton R. The Anatomy of Melancholy: Henry Cripps; 1628.

Carranza A. Tractatus novus et accuratissimus de partu naturali et legitimo. Sumptib. Joann. de Tournes et Jacobi de la Pierre; 1629.

Conforti M. Illustrating Pathologies in the First Years of the Miscellanea Curiosa, 1670-1687. Nuncius, 2015; 30(3): pp. 570-609.

Elsholtz J S. "De Conceptione Tubaria, Qua humani foetus extra Uteri cavitatem in Tubis quandoque concipiuntur: Itemq[ue] de Puella Monstrosa, Berolini nuper nata, Epistola". In: Miscellanea curiosa sive ephemiridum medicophysicarum Germanicarum academiae naturae curiosorum. 1676. pp. 76-81.

Feyens T. De viribus imaginationis tractatus. Gerardus Rivius; 1608.

[22] ニコラウス・ステノは 1669 年に執筆した「水頭症の仔ウシについて De vitulo hydrocephalo」（Steno N, 1673b）の中でそれまで胎児の奇形の原因が妊娠中の母親の想像に帰せられてきたことを指摘し、その上で解剖によって頭部膨張の原因を考察してその原因が母親ではなく胎児に帰せられるとした。安西なつめ（2017）。

Gabriel A, Donnelly J, Kuc A, et al. Ectopia Cordis: A Rare Congenital Anomaly. Clinical Anatomy, 2014; 27: pp. 1193-1199.

Huet M H. Monstrous Imagination. Harvard University Press, Cambridge, Massachusetts, London; 1993.

Lachmuns F. “Visceribus sub cute prominentibus in foetu”. In Miscellanea curiosa sive ephemiridum medicophysicarum Germanicarum academiae naturae curiosorum. 1673. pp. 166-167.

Lefèvre W, Renn J, Schoepflin U. The Power of Images in Early Modern Science. Springer; 2003.

Licetus F. De Monstrorum caussis, natura et differentiis libri duo. Crivellarius; 1616.

Lycosthenes/Wolffhart C. Prodigiorum ac ostentorum chronicon, Basel, Heinrich Petri; 1557.

Martínez M. Observatio rara de corde in monstruoso infantulo ubi obiter, et noviter de motu cordis, et sanguinis agitur. Matriti; 1723.

Paré A. Des monstres et prodiges. In: Opera chirurgica Ambrosii Paraei. apud Ioannem Feyrabend; 1594.

Paré A. Les Oeuvres d’Ambroise Paré. N. Buon; 1628.

Schenkius J G. Monstrorum historia memorabilis. Francfort; 1609.

Steno N. Embryo monstro affinis parisiis dissectus. In: Bartholin T. Acta medica et philosophica Hafniensia 1671-1672. Hafniae: Petri Haubold; 1673a. pp. 200-203, No. CX

Steno N. De vitulo hydroeephalo. In: Bartbolin T. Acta medica et philosophica Hafniensia 1671-1672. Hafniae: Petri Haubold; 1673b. pp. 249-262, No. CXXXI.

Todd R B. Abnormal condition of heart. In: Todd RB, ed. The Cyclopaedia of Anatomy and Physiology. London: Sherwood, Gilbert, and Piper; 1839. pp. 630-631.

Vanini, G C. De admirandis naturae reginae deaeque mortalium arcanis. Apud A. Perier; 1616.

Weese C. De cordis ectopia: commentatio anatomico-pathologica: Sander; 1819.

Weinrichius M. De ortu monstrorum commentarius. sumptibus Heinrici Osthusii; 1595.

アリストテレス，島崎三郎訳『アリストテレス全集 9　動物運動論・動物進行論・動物発生論』岩波書店，1969.

安西なつめ「Miscellanea curiosa 創刊号（1670）の報告者および主題の分析」，日本大学『国際関係研究』41, 2021; pp. 61-68.

安西なつめ「ニコラウス・ステノの『水頭症の仔ウシについて』―17 世紀後半における怪物（奇形）の原因としての“想像 imaginatio”―」，国際文化表現研究 13, 2017; pp. 145-157.

伊藤進『怪物のルネサンス』河出書房新社，1998.

鍛治義弘「ピエール・ボエスチュオー研究（5）『驚異の物語集』1」，大阪府立大学紀要（人文・社会科学）68, 2020; pp. 1-19.

菊地原洋平「ルネサンスにおける架空種族と怪物　ハルトマン・シェーデルの『年代記』から」，ヒロ・ヒライ，小澤実編集『知のミクロコスモス：中世・ルネサンスのインテレクチュアル・ヒストリー』中央公論新社，2014. pp. 150-190.